わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ

連218載

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

移民問題を考える

少子化社会になって長い時間が経ったが、日本はいまだに移民受け入れを認めていない。

国は決して移民を受け入れるとは口にしないが、少し前までは日本は多くの移民を送り出す国のひとつだった。

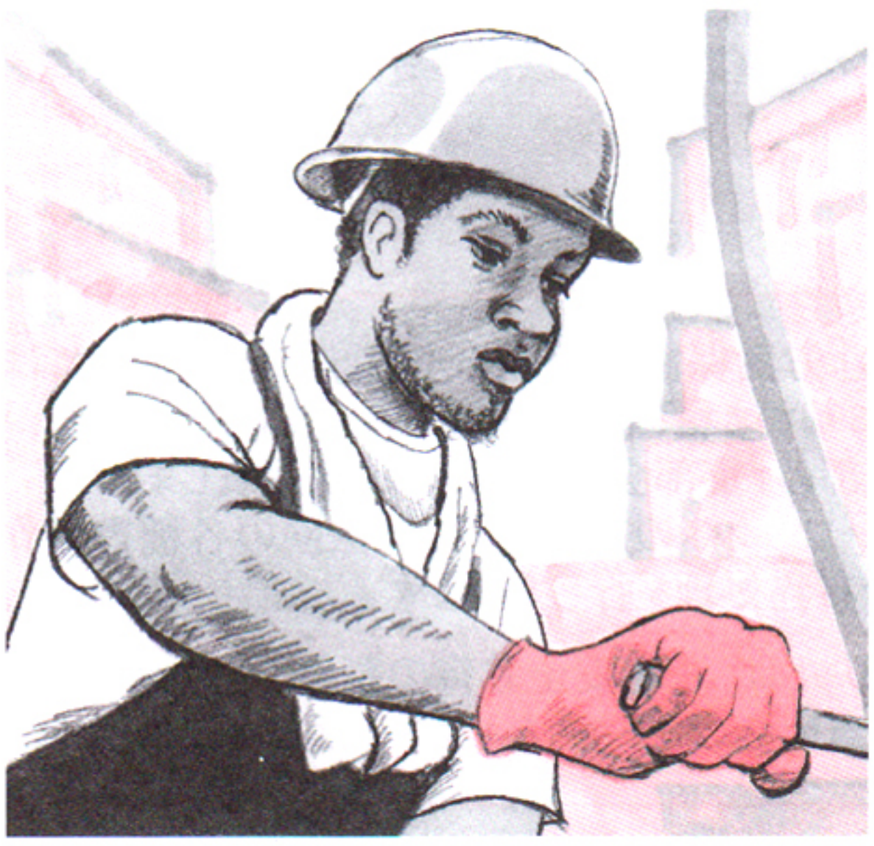
幕末、黒船来航を経て開国にいたった日本政府は、1866年にパスポートに相当する初の旅券を発券し、明治に入ると、まずはハワイへ国民を送り出した。当時は船を使っての数か月に及ぶ道のりで、今のように気軽に海外へ行く時代にあっては想像するのも困難なほどだ。

真面目で働き者の日本人は、国に錦を飾ろうと、それこそ身を粉にして働いたことだろう。当時、ハワイへ渡った人々は日本人だけではない。米国は、主にサトウキビ畑における労働力を得るために、中国やポルトガル、北欧などからも大量の人々を迎え入れた。

しかし、世は無常なり。1924年には排日移民法が成立し、結果的に日本はアメリカという大きな移民先を失うこととなる。次第に、移り住む先はメキシコやブラジル、ペルーなどの中南米に移っていく。

日本が満州国という傀儡（かいらい）国を作ったのも、新しい移民先を作るという施策と無縁ではないが、戦争に負けたことで、結果的に満州や植民地を失うことになり、以後日本は移民という言葉を使うことはとすらしなくなった。

1990年に入管法が改正され、多くのブラジル人が日本に定住することになり、日本人ではない人にも門戸を開いた形になった。当時、日本はバブル景気で労働力を欲しており、かたやブラジルは景気が悪化し労働力を持て余していたために、双方の利害が一致したのである。



労働力が不足しているときにはにこやかに受け入れる度量をみせるが、労働力が足りるようになったり、民族間のいざこざが表面化すると突然シャッターを下ろしてしまうのは、どこの国でも似たようなものだ。その身勝手さは、日本でも外国人を単なる一時的な労働者としてしかみなさない態度につながり、結果的に多くのトラブルを生んでいる。

2020年は新型コロナに始まり、新型コロナで終わった。飛行機などうになった。それ以前にも、かつて日本からブラジルに渡った人々は日本国籍を保持していたことから、その2世までは比較的緩やかに受け入れていたが、この改正によって日系3世とその配偶者も広く受け入れを認める移動手段の発展で、人間の行き来はスピードアップしたが、それはウイルスも同様で、瞬く間に世界に拡散した。

世界中の国々が、目に見えない敵から国民を守ろうと、ロックダウンや渡航禁止などの対策を取らざるを得ない状況になった。どの国も厚く硬い殻に閉じこもり、いつ自分がウイルスに冒されるのかと疑心暗鬼になり、外国人どころか隣人や家族にまで疑いの目を向ける。報道は悪い方へと偏りがちで、ますます人々を不安に陥れている。

改めて、移民という形で人々が国家間を自由に移動できた幸せや安心を懐かしく思う。

いつの日か、パンデミックは必ず収束するが、その時が来たときに、今の状況を忘れずにいたら、きっと私たちは世界中の人々に優しくなれるに違いないと思っている。

イラスト・伊藤香澄